

A C T VII 「GELVES」

あたしの目の前に、まるで国境線のように立ち塞がるメインコンピューターへの扉。この扉を開ければ、ラオコーン本体と…、つまりメインコンピューターと直に話しが出来る筈。ジンくんの説明によると、現在ラオコーンは機能をサブコンピューターに任せっ放しで、こっちがいくら端末機から呼び出してみても全く無視して応答してくれないんだそうだ。

せっかくここまで来たのに、結局は厚い扉にすべてを邪魔されている訳で、ちょっとばかり面白くない。

「他に方法は無いの？」

もう30分近くも端末機にかかりっきりのジンくんに、あたしはとうとう待ちきれなくなって訊いてみた。

「無いこともないですけどね。」

こっちを振り向きもせず素っ気なくそう答える。

「じゃあさあ、今度はそれでやってみようよ。」

「無理です。」

クルッと振り返って、はっきりと言い切った。

「な、なんでよ。」

あたしはジンくんの思わぬ行動にちょっと面食らって少しばかり押されながらも、それでももう一度食い下がった。

「僕の能力じゃパワー不足なんですよ。もう一つの方法っていうのは、直接ラオコーンに呼びかけることなんです。だから、能力の強い者がやればあるいは…。」

「あるいは叩き起こすことができるかもしれない…と？」

「え、ええ、厄介な眠り姫ですけどね。」

ニッと笑って頷くジンくんに大袈裟なゼスチャーをしてみせて、あたしは小さな声で言った。

「あたし、どっちかって言うと、王子様よりお姫様をやりたかったんだけどね。」

それからコンピュータールームの扉の前で精神を集中させた。

ラオコーン、あたしのこの想い、もし届いているなら、この扉を開けて。あたし、あなたと直接話しがしたい。

チラッと横目で隣を見ると、ジンくんが心配そうな顔であたしを見ている。ねえ、だけど多分大丈夫だと思うよ。少しずつだけど、あたしの願いに対してラオコーンが抵抗しているのが分かるようになってきた。でも、それはまだ機械的な防衛ラインで、ラオコーン自身はまだ遠くにいて様子を窺っているかのよう。あたしは薄いベールを剥ぐように、一つ、また一つと、防衛ラインを突き破って進んでいく。

その時だった、妙に懐かしい感覚があたしを襲い、それっきり防衛ラインが突き破れなくなった。今までとは比較にならない程の強い抵抗。おそらくは最後の関門。あたしの能力がここで試されるんだわ。

今まで以上にラオコーンへの想いを強くしてみる。それと同時に不思議な懐かしさも強くなってくる。駄目だ…、そう思った瞬間、まるでつかえ棒が急に外れたかのように、あたしの意識がなだれ込んできた。

「あ、あたし？」

そこにいたのは…、あたしの目の前で妖しく微笑んでいるのは、小さい頃のあたし。あまりの出来事に、ちょっと力を抜いた途端、ラオコーンはさらに奥へと逃げ込もうとした。あたしはハッと我に帰ると、その逃げるラオコーンの意識をつかまえた。

「ラオコーン、逃げないで、この扉を開けて。」

目の前の扉がスーッと音もなく開いた。あたしは無言でジンくんに合図を送ると、ゆっくりとコンピュータールームの中に足を踏み入れていく。

真っ暗な闇の中に次々とオレンジ色の小さいランプが、まるであたし達を誘導するかのごとく浮かんでいる。その突き当たり、周囲より少しばかり明るい所にメインコンピューターの中心部が立っていた。

「何故ナノ？何故コンナニ早く、コンナニ強イ能力が・・・。」

「ラオコーン、どうしてトリプタンの情報を出さないの。」

「ダッテ・・・、教エラレナインダ。僕ハソレ以上ハ知ラナイ。僕ニハ分カラナイ。ダカラ何モ言エナイ。」

明らかにこの前の時とは雰囲気が違う。何かに怯えているようにも感じられる。

「あなたはあたしに情報を出す義務があるのよ。それなのに知らないじゃ済まされないわよ。」

「ソレハ・・・。」

オレンジ色のランプが苦しげに点滅を始める。

この部屋の扉が開いた瞬間から、これはメインコンピューターでは解決しないということをおあたしは感じ取っていた。それは、このラオコーンの背後にもっと強大な能力を持って者がいるということを表して、あたしが会わなければならないのはまさにその者であると。

「ラオコーン、どうしたんだ、答えろ。」

「ギ・・・、ギギギ・・・、回答不可能・・・。」

鈍い嫌な音をたてて、ラオコーンはその動きを停止した。すべてのパネルの光が徐々に暗くなっていく。

「レイコさん。」

ジンくんはちょっとばかり青い顔をしている。あたしはなす術もなく、軽くため息をついてジンくんの傍へ寄ろうとした、その瞬間にたしかに停止した筈のラオコーンのパネルが、次々と光を取り戻し始める。

「レイコさん、あそこ。」

ジンくんが指差した方を見ると、何も無い筈の空間で新しい光が生まれつつあった。それは見るうちに大きくなって、やがて人間の形となってあたし達の前に存在していた。

そして、その光がゆっくりと顔を上げた。

「おまえが・・・、おまえが伝説の少女なのだな。さすが強い能力だ。ラオコーンがこうもあっさり負けるとはな。きっとおまえならこの戦いに終止符を打つことができるだろう。」

ラオコーンの合成された電子音とは違う男の人の声。

「ホログラフィーだ。」

ジンくんの言うとおりに、透き通った白い髪の毛、そう高くはない背丈、40歳前後の中年の男性がその空間に浮かび上がっていた。

「あなたは誰？あなたならあたしの疑問に答えてくれるの？」

「私の名はゲルベス。コンピューター・ラオコーンの生みの親だ。いや、正確に言うならば、私もラオコーンの頭脳の一つなのだ。」

「それは・・・。」

「その少年の言うとおりに、私の姿は立体映像で映し出している。なんせ私の身体は45億年もの大昔に捨ててしまったのでな。しかし、私は生きなければならなかった。たとえ頭脳だけになったとしてもだ。」

あたしは何か喋ろうとしたけど、黙って頷くのが精一杯だった。

「それはおまえの疑問に答えるためだったのかもしれない。だが、そのためにはある二つの惑星の話をしなければなるまい。」

どこからともなく椅子が現れた。気がつく映像のゲルベスさんもいつの間にか座っていて、あたし達にも座るように指示している。そして、まるで子どもに昔話でもするかのように、ゆっくりと話しを始めた。

「あれは、この三次元空間がまだ混沌とした一つの空間だった頃のことだ。この広大な宇宙に惑星というものがまだ二つしか存在していなかった時期があった。この二つの惑星は双子星で、それまで数多く存在していた恒星とはいくつかの点で明らかに違っていた。そして、この二つの惑星をラオコーンとエルカーナと呼んでいた。」

「ラオコーン？」

これはあたし。

「エルカーナだって？」

これはジンくん。

二人はほとんど同時に二つの惑星の名を叫んでいた。あたしはエルカーナという名前には覚えがないけど、ジンくんにとっては聞き覚えがあるよね。

ゲルベスさんは、あたし達の顔を交互に見て静かに頷いた。

「そうだ、ラオコーンとエルカーナだ。ある時、この二つの惑星で大爆発が発生した。それはエルカーナの科学者のちょっとしたミスだったのだが、結果はちょっとしたところのことではなかった。一番困ったことには、その大爆発のせいで次元には裂け目ができてしまったのだ。」

「そ、それでどうなったの？」

「次元の裂け目は、この三次元空間を五つの空間に分けてしまう結果となったのだ。そして、それぞれの空間はそれ以降交じり合うこともなく、時間の流れ方の異なる独立した空間として存在することになる。」

「それは、フェリアと地球がそっくりの惑星ってことと関係あるの？」

「それは後で説明しよう。もう少し昔の話をしてからだ。この大爆発の時、私はちょうど転移装置の研究をしていてな、二次元空間を旅行中だったのだ。ラオコーンに帰って来た時、そこにあるべき二つの惑星はほとんど原形を留めていなかった。私はすぐさま生き残っているかもしれない仲間を捜し回った。その時に次元の裂け目に落ち、そこで新しい生命を見つけた。つまり、思議、地球、フェリアとジュール、クロス、イオルスと現在おまえ達が呼んでいる六つの惑星だ。そして、その中でもフェリアとジュールという故郷によく似た双子星に興味を引かれた私は、フェリアに転移装置を移し、コンピューターに私の頭脳をコピーし終えると永い眠りに就いたのだ。」

ここで深いため息をつくとき、急に何かに気づいたように右手をスーッと上げた。

「いや、どうやら急がねばならないようだ。」

「どうしたのですか？」

「トリプタンだ。続きを急いで話さねばな。その後、何度か目が覚めた私は、各惑星の生命の進化を見続け今日まで来たのだ。その中でもジュール人が築いてきた文明は、その昔ラオコーンとエルカーナが歩んで破滅した道によく似ていた。このままでは再びあの惨劇が起こると考え、人々のためにコンピューター・ラオコーンをプログラムし再び眠りについた。その後のジュール人は急速に破滅への道を突き進み、どうやらトリプタンというコンピューターを造りだしてしまったようだ。あれこそ、まさにエルカーナの人々を悪夢へと導いた元凶に他ならないのだ。おまえ達は私の示した道をたどりここまで来てくれた。あとは自分達の手で運命を切り開くしかないだろう。」

なんとも言えないほどのせつない表情。すべての想いが流れ込んでくる。

「ゲルベスさん…。あたし達は、ずーっと一つのことを気にしていました。もしかすると、あたし達は誰かに操られているのではないかと。でも、それも今はっきりと分かりました。これも運命の一つなんだと…。」

「いや、それは違う。運命なのではなく、これが真実なのだ。無限の宇宙に漂う真実。これだけしかないのだ。」

「はい…。」

「私は少し疲れたようだ。また長い眠りにつくことにしよう。伝説の少女よ、もしこれ以上の真実を知りたくば、ユウスディナの石に訊くがいいだろう。」

「ゲルベスさん！」

あたしが叫んだ時には、既にゲルベスさんの姿は薄くなり、やがて周囲のすべての光も消えうせて闇が迫ってくる。あたし達は慌てて部屋の外へ出た。

「レイコさん…。」

コンピュータールームを出るなり、ジンくんが何かを言いたげに振り返る。

「ん、分かっているわよ。アトリー達にはまだ黙っているわ。」

「いいんですか？」

「そうねえ…。今はいいんじゃない。いつかは話さないといけない日が来ると思うけど。暫く様子を見ましょ。」

「分かりました。」

あたし達はそれっきり一言も喋らずに、そのままボーッと通路を歩いていた。ゲルベスさんの話しは短かったけど、あたしにとっては計り知れないほどの深い、そしてあまりにも広大な想いだった。

もう一人の鈴子には何をすればいいのかを教えてもらった。ゲルベスさんには何故あたしが必要なのかを教えてもらった気がする。

あとはあたしがどうするか…だけ。考えるまでもなく、あたしはあたしの意思で行動すればいい。

あたしはトリプタンを倒す。

「リン！ジン！」

不意に後ろから叫ぶ声で我に返った。桂木さんが通路を走ってくる。

「おまえら、メインコンピューターに何をしたんだ。」

「えっ？」

ジンくんとあたし、一瞬その台詞に反応して顔を見合わせてしまった。この時、ボーッとしていたのと不意を衝かれたというのもあって、心をシールドするのを忘れていた。つまり、桂木さんの問いに対して心の中でその答えを思い浮かべてしまった。そのせいでテレパスである桂木さんには全部筒抜けになってしまった。

「そうか…、あの人は話してくれたのか。」

「え、あ…、分かっちゃった…みたいね。」

桂木さん、難しい顔で頷く。

「二人ともこのことは他の者に言うなよ。幸い他にテレパスはいないし、口にさえ出さなければばれる心配はないだろ。」

「桂木さん！」

「大丈夫だよ。もし、本当に話さなくてはならない時が来たら、その時はちゃんと俺の口からみんなに説明するさ。だから…。ん？おい、ジン、大丈夫か？…おい！」

桂木さんがまだ話している途中で、ジンくんは崩れるように差し出された桂木さんの腕の中へ倒れた。

「おい、ジン！おい、おい。リン、早くジェニーを呼んでくれ！」

「は、はい。」

返事はしたものの、あたし方向音痴だもんで、どっちがメディカルルームだか分かんない。

「そこにインターホンがあるだろ、誰でもいいから早く呼んでくれ。」

とにかく、近くの壁にあったインターホンのスイッチを入れると、必要以上の大声で叫んでいた。

「ジェニー！ジンくんが倒れたの、早く来てえ。」

おそらくは基地中に響いたんじゃないだろうか。そして、その声で一番最初に駆けつけてきたのは、担架を持ったアトリーと尾田さんだった。

メディカルルームに担ぎ込んだ時には、ジンくんの意識は完全になくなっていた。ジンくんの寝かされた横では、薬で眠らされているユーリが可愛らしい寝顔を見せている。

「ジェニー、どうなんだ？」

「ちょっと黙ってて、死ぬようなことはないから。」

「あ、ああ、悪い…。」

桂木さんは素直に謝るとアトリー達がいる隣の部屋に移った。あたしはどうか考えてジェニーの顔を見ると、ジェニーは静かに首を横に振っている。まあ、仕方がないわね、あたしも一緒に隣の部屋に引っ込むことにした。

ジェニーが診察する間、その30分間くらい桂木さんはずーっと狭い部屋の中をウロウロウロウロ…、まったく落ち着かないったらありゃしない。

「桂木さん、少しは落ち着いたらあ。」

「あ、ああ…。」

駄目だ…、典型的な生返事という奴。

ウロウロウロウロ…。

ええい、邪魔くさい！

「終わったわよ。」

ジェニーがドアの隙間から顔だけ覗かせてそう言った。

「で、どうなんだ。原因は何なんだ？」

なんか訊いているというよりジェニーに掴みかからん勢い。

「大声を出さないでよ。単なる過労なんだからさ。」

「過労…？」

「そうなんだ。でも、ちょっと妙なよ。」

「妙…って？」

「普通ならあんな疲れ方ってする筈がないんだけど、あれはジンが潜在能力を限界以上に出してしまったとしか思えないのよ。」

ジンくんの能力？まさか、あの時…。

「だけど、ジンの能力って何だ。そもそもジンにそんな物があつたのか？」

「そうか、ショウは知らなかったんだっけな。ジンは地球人とジュール人の混血なんだ。おそろくだけど、テレパシー能力くらいはあつても不思議はないだろうね。」

アトリー達はジンくんの父親が誰かは知っているも、桂木さんの生い立ちは知らない。尾田さん達はジンくんの生い立ちを知らない。この二人が兄弟だなんて、きっと夢にも思っていないんだ。

「それにしたってさ、なんでそんな無茶をしたんだ。なあ、レイちゃん、何か知らない？」

「えっ？」

桂木さんが瞳で制止しているのが分かる。たしかにこうなつた原因を話すには、コンピュータールームに入ったことを話さねばならなくなる。そうしたらゲルベスさんの話しにも触れない訳にはいなくなる。

「ううん、知らないわ。」

「そうか…。」

みんな、ごめんね…。

ジンくんが限界以上に能力を使ってしまったとしたら、それはあたしのせいだわ。ジンくんにとって、あの部屋に入る行為そのこと自体が、ひよっとすると精一杯だったのかもしれない。

「よお、ん？どうしたんだ、みんな暗い顔をして。」

「ラムダ…。」

この男のせいだと言うべきか、この場合はおかげでと言うべきか、落ち込みかけていた雰囲気少し元に戻つたわ。

「オペレーションルームにリョウから連絡が入っているぜ。」

「なに！よし、すぐ行こう。」

アトリー、桂木さん、尾田さんの三人は、それを聞いた途端に脱兎のごとく駆け出していった。

「で、お宅らはこんな所に集まって何かあつたの？」

ラムダがのんびりとした口調で訊くもんだから、なあんとなくこっちも和んでしまった。

「ん、ジンくんがちょっとね。」

「で、大丈夫なのか？」

「うん、ちょっと過労だつて話したから、少し休めば大丈夫だろうって、それにジェニーもいるしね。」

「そうか、じゃあオペレーションルームに戻るかな。どうせ、そろそろ出番だろうからな。」

「うん、じゃあ、ジェニー、頼むわね。」

「任せといて、どうせ半日も寝かせとけば元気になると思うから、そしたらあたしもそっちへ行くわ。」

バトルスーツの上から引っ掛けている白衣を脱ぎながら、束ねていた髪をといて右手ではらう。

「うん、それじゃあ…。」

寝ているジンくとユウリのほうをチラッと見てから、あたしはなんとなく頷いて走り出した。

「違う！いい加減に覚えろよ。オペレーションルームはこっちだぜ。」

「わ、悪かつたわね、物覚えが悪くて。あんたがサッサと案内すればいいんでしょ。」

あたしが走り出した方向と別の方を指差しているラムダに、思わず憎まれ口を叩いてしまって、慌ててラムダを急かしてオペレーションルームへと走る。まったく、どうもラムダが相手だと調子が狂っちゃうんだよね。

「桂木さん、トリプタンは？」

オペレーションルームに飛び込むと、誓一さんと遼さんが帰って来ていて、二人を取り囲むようににして他の人達がいた。

「あれだよ……。」

アトリーが中央の大スクリーンを示す。今や巨大な要塞と化してしまったトリプタンがそこに映っている。

「現在、アリンIからアリンVまでの五つのステーションと合体して、ラオコーンはこの真上に静止している。」

誓一さんが角度を変えた写真を見せながら説明してくれる。

「だが、この真上で静止したっきり、べつに攻撃してくる訳でなし、ザップが出てくる訳でなし、なんか妙なんだ。」

あたし達はスクリーンのトリプタンを見入った。

「もし、トリプタンのほうにフェリアを攻撃できない理由があれば？」

「理由って？」

「この前サーミンが言いかけたこと、ジュールを捨ててまでトリプタンが動く必要性よ。」

「リン！」

桂木さんが恐い顔で叫んだ。

「シグマ、悪いのはお宅だぜ。もっと早くこのことに気づいていれば、トリプタンがこんなになるまで放っておかなかったんだからな。」

ラムダったら、アトリー達みんながあえて言わなかった一言をあっさりと言ってしまった。アトリー達はジッと桂木さんを見ている。桂木さん、ゆっくりとみんなを見回すと、ポツリと一言。

「すまなかった……。」

その瞬間、みんなと桂木さんとの間にあった薄いベールが一枚、ようやく取れたような気がした。

「それじゃ、トリプタンを片付けるか。ボヤボヤしていて先に動かれると面倒だ。」

ラムダがオペレーションルームを出て行こうとした瞬間、あたしの心の中に誰だか分からない思考が飛び込んできた。

「駄目よ、トリプタンが動き出すわ。」

誰？もう一人のあたし……？

「トリプタンが今まで動かなかったのは単にエネルギー不足のせいよ。今出て行ったら狙い撃ちされるわ。」

分かった、ありがと。

「桂木さん、トリプタンが動き出すわ。」

「ん、俺にも聞こえたよ。アトリー、説明している暇はない。とにかく俺達も出るぞ。」

「あ、ああ。」

ごく少数のテレパスを除いて、みんな状況が見えなくて怪訝そうな顔をしている。とりあえず桂木さんの言葉に従って部屋を出ようとした途端、スクリーンを見ていたユウが叫んだ。

「待って、トリプタンが動き出したわ。」

トリプタンはその巨大な要塞ごと、初めはゆっくりと、そしてだんだんと速く回転しだした。

「シグマ、どうする？アルテミスじゃ出られないぜ。」

部屋を出ようとしていたみんなが一斉に桂木さんを見る。

「俺に任せてくれないか、いい考えがある。」

「いい考えって……、おい、リョウ！」

遼さんの長い前髪の奥でフォックスブラウンの瞳がキラリと光った。

「あっ……。」

なーるほど、その手があったかあ。

「じゃーな！」

ちょっと振り向いて、右手を上げたときにはその姿はかき消すようになってしまう。

「なんだあ、あいつ何をしようってんだ。」

「いいのよ、遼さんに任せときなさいって。それよりトリプタンの動きから目を離さないで。」

ちょっとむくれているラムダを宥めながら、スクリーンに目を移した。トリプタンの動きはさっきの何倍ものスピードになっていて、既にスクリーンの解像度では追いきれなくなっている。ほとんど実態がぼやけたトリプタンのしたから、ドラ焼型のザップの列が出てくるのがかろうじて見える。

「畜生！このまま指をくわえて見てろっていうのかよ。」

「ラムダ、落ち着け、リョウの合図を待つんだ。」

「リョウの合図って、あいつは何をやるうっていうんだよ。このまま手も足も出ないっていうなら……。」

ザップの攻撃が始まった。いくつかの爆発音とともに基地全体が揺らぐ。

「アトリー！第二ブロックがやられました。」

ユウが悲痛な叫び声をあげる。

「シグマ、止めるなよ。俺はもう我慢ができない。」

ラムダがオペレーションルームを飛び出そうとした瞬間、スクリーンのザップが次々と爆発して落ちていく。

「ああ、止めやしないさ。今飛び出さない奴はブタに蹴られて死んでしまえっていうんだ。みんな、行くぞ！」

桂木さんはそう言うが早いか、ポカンとしているラムダを押しつけて部屋を飛び出していった。みんなもその後が続いて走っていく。

「や、やい、俺を置いていくな。」

そして、なぜか一番先に行きたがっていたラムダだけがあたしの前に残っていた。

「そんな所で喚いていないで早く行ったら？」

「分かってるよ。」

フツ！と鼻を鳴らして、慌ててみんなの後を追いかけるラムダ。さあて、んじゃ、あたしもそろそろ行くとしますか。

「ユウ、あとは頼んだわよ。あ、それから、もしトリプタンを見失ったら、メインコンピュータに訊くといいわ。」

「はい……、えっ？」

「じゃあね。」

ユウにウインクをしてオペレーションルームを出た。あたしが格納庫に着いた時には、既にみんなは飛び立った後で、残っているのは壊れたアルテミスとスラッグだけ。アルテミスならともかくスラッグじゃあ、ちょっと一人で動かすのは恐いかな。

「あれえ、レイコさん、そんな所でどうしたんです？」

あ、ジンくん、それにジェニーも、やったね。

「いいところに来たわ。もう身体は大丈夫なの？」

「うん、この通りにね。で、察するところ置いていかれたって訳ですね。」

「まあね、スラッグじゃ動かし方も分からないし、ちょっとどうしようかと思っていたところ。乗っけてってくれるでしょ？」

「もちろんです。さあ、行きましょう。」

ジンくんとジェニー、そしてあたしの三人が乗り込んだ戦艦スラッグは発進した。発進用ゲートを抜けると、目の前で桂木さん達がザップ相手に戦っているのが見える。そして、トリプタンはその上空にいた。

「ジンくん、ザップには構わないで真っ直ぐトリプタンに向かって。」

「了解！」

ぐいーんと一気に上昇するスラッグに何機かのザップがまとわりついてきたけど、ジェニーが簡単にそれらを撃ち落した。下の方をと見ると、数多くのザップが撃墜されて噴煙を発生しているのが見える。

「レイコさん、少し揺れますから何かに掴まってください。」

「ん、分かった。」

ちょっと間を置いて、スラッグの横っ腹にミサイルが突っ込んできた。スラッグがバランスを崩しかけたのを、ジンくんの必死の操縦でなんとか持ちこたえる。

「今度はこっちからいくわよ。」

体勢が元に戻るや否や、ジェニーがミサイルを発射した。が、ザップは素早い動きでなんなくかわしてしまう。

「ジン、右に回りこんで！」

「了解。」

ジェニーが叫んだ瞬間、囲むようにまとわりついていたザップが一気に吹き飛んだ。呆気を取られているあたし達の鼻先をシューザーが横切っていく。

「ハリー！」

「なあにのんびりとやってんだよ。ほら、上でお客さんが待ちくたびれているぜ。」

「あ、ありがとう。」

シューザーは再びザップを追って急降下していった。

「よし、ジェニー、フェリアン粒子砲の用意。」

「はいよ。」

スラッグは再びトリプタンに向かって上昇を始める。スクリーンには薄暗いブラインドにかかり、ジェニーの前にミッショントリガーがせり上がったきた。

「照準補正、秒読み開始！」

ジェニーの声が静かな艦内に響き渡る。

「三、二、一！」

スラッグの前方の空間が光った。ブラインド越しながらもそのあまりにも強い光ゆえにスクリーンがホワイトアウトの状態に陥ってしまった。強い反動が震動となってスラッグを襲う。

「トリプタンは…？」

あたしの目にははっきりと見えていた。渦巻状のフェリアン粒子が当たったと思った瞬間、その渦巻きがトリプタンの回転に拡散されて、大きな要塞のほんの一部を焦がしただけだったのを。スクリーンのブラインドが上がって、映像が戻ってくるまでの数秒間、その数秒間が二人にはどれほどの長い時間を感じられたのだろう。でも、この数秒間の間であたしは身体の奥底から湧いてくる力をたしかに感じていた。

「そんな…、フェリアン粒子砲でも効かないなんて。」

あの回転がこのためだったとすれば、トリプタン、あんたは大したコンピュータだわ。

「ジンくん、スラッグの外に出られるハッチってどこ？」

「何をするんですか？」

「ね、任せてくれないかな。あたし、自分の能力を試したいのよ。今やらなきゃおそろく一生後悔するわ。それに、あたしにはそれだけの能力があると分かったのよ。」

ジンくんはジーンとあたしの瞳を見ている。あたしもあえて心をシールドせずにジンくんの瞳を見返した。

「ん、分かりました。ハッチまでの道順は指示します。早く行って下さい。」

ニコッと微笑む。ほんとにまだ少年の面影を残した笑顔を見せる。

「ありがと、じゃっ。」

ジェニーが何か言いたそうなのを右手で制して、あたしは通路を飛び出した。ジンくんがテレパシーで指示する道順をたどって、スラッグの非常用ハッチの前まで来た。

「ジンくん、一応そのままアシストしてて。」

あたしが慎重にハッチを開いて調整室に身体を滑り込ませる。外側にもう一枚の扉を開けると、一気にものすごい風が吹き込んでくる。一瞬その風圧にたじろいでしまってから、素早く外へ出て扉を閉じた。

うう、飛び出したはいいけど、かなりの風圧に船体にへばりついているのも苦しい。どうにかしなきゃね。あたしは精神を集中して、自分の周りに透明の壁をイメージした。風が弱まって呼

吸も楽になる。これでなんとか戦えるわね。あたしはキッとトリプタンを睨みつけると、あらん限りの大声で叫んでいた。

「トリプターン！あたしが相手になってあげるわあ。」

あたしは渾身の力を指先に集中させると、両手にできたエネルギーを球状に丸めてトリプタンめがけて投げつけた。エネルギー球は白い閃光となってトリプタンに襲いかかる。しかし、爆発したのはほんの一部だけ、それもトリプタン本体じゃなくてアリンⅡの一部。

もう一度、あたしはエネルギー球を投げつけてみた。でも、結果は同じ。トリプタンはびくともしていない。

「レイコさん、外から攻撃しても無駄ですよ。あの回転がエネルギーをみんな拡散させてしまうんです。」

ジンくんの思考が流れてくる。

それは分かってんのよねえ。でも、あのトリプタンに潜り込むにはあ…。やっぱりやるしかないか。あたしは改めてトリプタンを見つめる。大きく深呼吸をして、深く心を落ち着かせて…。

飛べ！

一瞬の閃光が目の前を走りぬける。思わず閉じてしまった瞼をそっと開けると、そこは見覚えのあるフロア、そうトリプタンの内部だった。あたしは即座に身構えると、身体の周囲にシールドを張った。

「ほう、とうとう能力の使い方を覚えたのか。そのエネルギーこそ私の本当に欲するものなのだよ。森柄鈴子、地球人だな。なぜ関係もないおまえがこの世界に首を突っ込むのだ。私に勝てると思うのか？」

「勝つわ！勝ってみせるわ。あんたの野望を打ち砕いてあげるわ。」

「フウ、ハ、ハ、ハ…、愚かなことを、おまえ達人間ごときの力では勝てないのだ。勝てる筈がない。」

「うるさいわねえ、世の中そんなに思い通りいくもんですか。」

「だが、そういうものだ。ハ、ハ、ハ…。」

コンピューターの乾いた笑い声なんて聞きたくもない。いくわよお。フーツと息を吐いて気を溜めると、ゆっくりと右手を頭上に伸ばす。

「まあ、どこまでもつか、頑張ってみるのだな。」

トリプタンの言葉を合図に数知れない熱線の束が降り注ぐ。でも今度は逃げない、シールドがすべての熱線を跳ね返してくれるから。この頃になってようやくアトリー達が追いついてきたみたい。けっこう近いところで爆音が響いていて、震動がかなり強くなってくる。

さあて、今のうちにトリプタンの弱点を捜さなきゃ。パネル、スクリーン、ボディをいくら壊したところで自己修復機能が働いて意味がないわよねえ。あとはメモリーか…。と言っても、コンピューターの命とも言えるメモリー部分なんかは、他の部分の比にならないくらい外からの攻撃に対して堅牢な筈。

ずーっと上のほうを見ると、パネルそそのもつと上に頭脳カプセルがあるのが見える。でも、まあ、無駄だろうな。そう思いながらも精神を集中してカプセルを狙う。

ズガガーン！

うう、集中できない。今回のかなり大きな揺れ。どうやらトリプタンの横っ腹に誰かが突っ込んできたみたい。みんな無茶してなきゃいいけど。あたしは改めてカプセルに向き直ると、もう一回カプセルを狙ってみる。

「おーい、生きてっかあ！」

ああ、また集中できない。チラッと声のほうを見てみると、顔の煤けたラムダが手なんぞ振っている。まったく、邪魔しにきたのか、お宅は…。

「ラムダあ、一人だけえ？」

「ああ、でも、すぐ他の連中も来るんじゃないかあ。」

ラムダはこの熱線の激しさのせいでこのフロアには入ってこれない。でも、逆に考えればトリプタンの攻撃範囲はこのフロアだけだと示しているようなもの。

「ラムダあ、誓一さんが来たら、すぐにシールドを張るように言ってえ。」

「了解！」

ラムダにそれだけ伝えると、あたしは再度カプセルに集中した。この邪魔っけな熱線さえなきやねえ、何もこんなに集中しなくてあんなカプセルくらい簡単に吹き飛ばせるんだけど、能力をシールドのために分散しているし、集中しようとする邪魔する奴はいるし…。

カプセルの中央に焦点を結んだ。その感触を掴んだ瞬間、あたしの右手からエネルギー球が発せられた。

「あ…。」

当たった…と思ったら、変な方向に曲がって弾き飛ばされた。

「ハ、ハ、ハ、ハ…、無駄なことだよ。このカプセルには特殊偏光シールドで覆われているのだ。」

まあ、そうだろうなあ。でなきゃ頭脳カプセルなんて大事なもんが、あんな無造作に見える位置に置いてある訳ないもん。それにしても、そうなる別々の弱点を捜さなきゃねえ。

「おい、弱点を捜してんなら、俺にいい考えがあんだけど…。」

うわあ！

「ラ、ラムダ！お宅、どうやって？」

何故なのか、熱線が降り注ぐ中をラムダが一人で平気な顔で立っている。

「いや、そのお、なに、俺にもできるかなあって思ってな、ちょっと試してみたんだ。そしたら、なんかできちゃったわ。はは…。」

「あのねえ、なんでお宅ってそんなに緊張感がないのよ。まったくう…。」

「ま、いいじゃないか、できちゃったもんはしょうがない。で、ちょっと耳を貸してくれる？」

ラムダはちょっと身をかがめて、あたしの耳元で小声で話し始める。

「あのな、トリプタンのパネルの内側にメモリーバンクってのがある筈なんだ。そのメモリーバンクはブロック状になっていて、ありとあらゆるエネルギーに対してはけっこう完璧な防御をするんだが、ただ一つ精神エネルギーにだけは無防備なんだ。」

「でも、あのパネルは跳ね返すわよ。」

「あのパネルは物理的な力に弱いんだ。なんせセラミック製だから。」

「で、どうしようっていうの？」

「なあに、あのパネルは何とでも壊せると思うから、そしたらメモリーバンクを抜き取っちゃおうって訳。」

「テレキネシスで？」

「もちろん。」

あ、頭が痛い…。なんでそんな落とし穴があるのか理解に苦しむ。

「ラムダあ…。」

「ん、なに？」

「今の桂木さんの受け売りでしょ？」

「あら、分かっちゃった？」

「分らないでか。まったく、お宅って頭がいいんだか悪いんだか…。だいたいねえ、それって誰がやんのよ。私だってまだどこまで自分ができるか分かんないわよ。」

「あ…、そう言われりゃあそうだな。」

今ごろになって妙な納得の仕方をしないでよ、もう…。

「とりあえず桂木さん達が来たみたいだから相談してみるわ。」

あたしは桂木さんにこっちの状況を伝えると、他の人達にアリンステーションの破壊をお願いした。まあ、向こうは誓一さんがいるから大丈夫でしょ。ということは、結局こっちはラムダと二人でやんなきゃならないのか。向こうの作業が終わり次第、桂木さんもこっちに応援に来てくれることにはなったけど、どうせ桂木さん一人じゃこのフロアに入っちゃいけないもんね。

「ラムダあ、お宅、メモリーバンク抜くの出来そう？」

「出来るも出来ないも、シールドだって出来るとは思っていなかったし。」

「じゃ、努力してみるってことでよろしく。」

あたしはトリプタンに向き直ると、真っ赤に光っているパネルを凝視する。その瞬間にパネルのいくつかが次々と割れていく。見るとどこから出したのか、ラムダがパチンコでパネルを一つずつ割っていた。

いくつかメモリーバンクがむき出しになる。そこを手がかりにパネルの裏側の様子がよく見えるようになった。あたしはその内の一つに強く意識を集中してやる。

「な、何をする。や、やめろー！」

トリプタンは明らかに狼狽していた。おかげで熱線もかなり狙いが外れて乱れるようになってきた。どうやら本当にそこがウィークポイントらしい。

「莫迦ねえ、やめろって言われてやめる訳ないじゃない。ほうら、いくわよお！」

あたしはいっそうの力を込めて一つ目のメモリーバンクを抜き取った。ブロックの一つがフワッと浮かび上がって、そして思いっきり宙を舞って床に落ちる。一つ目が落ちたのを待っていたかのように、次々とメモリーバンクは宙に舞い始める。一回コツをつかんでしまえば、あとのブロックを抜くのは簡単だった。

それと同時にトリプタンの動きがおかしくなり始めた。熱線の向きがメチャクチャになったおかげで、自分で自分を傷つける形になり、余計あたしにとって好都合になってくる。

「ラムダ、今のうちに…って、何をやってんの？」

「いや、メモリーバンクに意識を集中するとシールドが消えちゃうんだ。熱線の方向がこっちに向いてなくて助かったよ。お宅はよく同時にこなせんな。俺にやとでも無理だわ。」

よく見るとラムダの左腕に焦げた跡がついている。たぶん熱線でやられた火傷。平気な顔しているだけに、あたしには妙に痛々しく見える。

「ごめんね、無理言っちゃって。ラムダ、少し休んでいいわ。」

「いや、お宅のシールドの中に入れてくれればそれで十分。」

ニヤッと笑ってあたしの肩にもたれかかってくる。

「ラムダ…。」

「ほら、残りを片付けちまおうぜ。」

意外だった、こんな能力に器用と不器用が存在するなんて…。ラムダはあたしがブロック一つを抜く間に五つくらい抜いてしまう。15分くらいの間にメモリーバンクの大半は抜けてしまった。残りのだけでは、おそらくコンピューターとしては何の役にも立たないだろうし、自己修復機能も効かない筈。

「やめろ…、記憶が…。私はトリ…プタン…。わた…しは…、ト…リプ…タ…。」

まるでぜんまいの切れたオルゴールを聴いているかのようにゆっくりと音が途切れて、静かにその機能をすべて停止した。最後まで頑張っていたパネルのランプも一つ二つと消えていく。

「さあて、そろそろ帰りますか。みんな心配してんぜ。」

「うん。」

なんとなく寂しかった。勝ったという気はまったく湧いてこない。ただ、なんとなくラムダの言葉に返事を返しただけ。ポンッと肩を叩いて歩き出したラムダが、まるで何かにつまずいたかのようにその場で転んだ。そのラムダの姿を見て、あたしはやっと我に返った。

「ラムダあ！」

「気をつける！トリプタンはまだ生きてるぞ！」

桂木さんの声がフロア全体に響き渡る。

次の瞬間、あたしが咄嗟に作ったシールドでラムダに向かってきた熱線を弾き返していた。

「よくもやってくれたな、しかし、私は死なん。必ず甦る。そして、再び夢を実現してやる。ハ、ハ、ハ、ハ…」

トリプタンの最後の台詞を言い放つと、最後に一つだけ残っていたパネルの光がようやく消えた。

「リン、あと五分でこの要塞は爆発するぞ。早く脱出するんだ。」

空虚な頭の中に桂木さんの声だけが響いている。

「ラムダ！」

「ん、聞こえているよ。脱出しようぜ。」

あたし達はお互いに頷くと、せえので同時に走り出した。桂木さんはラムダの無事を確認した時点で既に脱出したみたい。ということは、おそらくあたし達二人が最後。

「ラムダ、お宅のアルテミスは？」

「突っ込んで来た時に壊れた。あれはもう使い物にならないな。」

「あのねえ、帰りのことを考えていなかったでしょ。まあ、いいわ、その腕時計で脱出しましよ。」

「二次元プリンターだって。だけど、こいつも壊れているぜ。」

「えーっ、なんで？」

「こいつで転送したアルテミスを壊したんだ。当然こいつも壊れるのさ。まあ、いざとなったら飛び降りるしかないだろう。」

あちゃあ、なんであたしはこんな能天気な男と脱出しなきゃなんないのよ。もう、神様の意地悪。

ラムダが突っ込んできた壁には大きな穴が開いていて、その穴の反対側には原型を留めていないアルテミスが壁にめり込んでいる。

「どーやったらこんな風に壊して本人は無事な訳？」

「べつに……。」

「まあ、いいわ。アルテミスの壊し方は次の機会にゆっくりと聞くとして。お宅、テレポートは出来そう？」

「うーん、そりゃ無理だろう。それが出来るぐらいなら、俺だってこんな無茶はしなかったもん。」

「だったら初めっからそっちを使えばよかったのに。」

「アルテミスを使用している間は転移出来ないんだ。」

いい加減イライラしてきた。こんなことをしている間にも爆発まであと一分に迫っていた。

「やっぱり、飛び降りるか。」

「冗談はやめてよ。いいわ、あたしがお宅を抱えてテレポートするから。その代わり、変な所を触ったら許さないからね。」

「了解。」

あたしがラムダの身体に抱きついた瞬間、大きな爆音とともに床が大きく傾いた。

「うわっ！」

その反動でよろけたあたし達は、アルテミスが開けた大穴から投げ出されてしまった。こうなったらフェリアに着地する以外に助かる道はない。空中で、しかも落下中という状態で、人間二人の体勢を立て直すのってのは、思っている程簡単なものじゃなかった。二度、三度と空中で宙返りをして、やっと体勢を整えた時、あたし達の頭上で大爆発が起こった。おそらくトリプタン本体の爆発だろう。

ところが、体勢を立て直すので精一杯だったわたしはシールドも張っておらず、そのものすごい爆風は、あっという間にラムダとあたしを引き離してしまった。

「ラムダあ！」

咄嗟にテレキネシスで捕らえようとしたけど、ラムダの動きが早くてすぐに見失ってしまった。

「ラムダあ！ラムダあ！」

あたしは狂ったようにラムダを呼び続けた。しかし、ラムダからの応答はない。やがて、先に地上に降りていた桂木さん達の姿が識別できるようになり、あたしは着地の態勢に入らなければならなくなった。落下スピードを徐々に落とし、念のためシールドを張る頃には、もう地上が目の前まで迫っていた。

あたしはゆっくりと身体を縮めて膝を抱えると、さながら分解写真を見るがごとくのムーンサルトで桂木さんの真ん前に着地。オリンピックだって10.0間違い無しってぐらいの完璧な着地。

「桂木さん……。」

「ラムダは？一緒じゃなかったのか？」

「捜して……、爆風で飛ばされて……。」

桂木さん、あたしの肩をそっと抱いてくれる。桂木さんの手が暖かい。

「サーミン、ラムダの姿を捜してみてくれ。運が悪けりゃ宇宙空間まで飛ばされているかもしれないが……、いや……。」

サーミン、黙って頷くと、スーッと瞳が紫色に輝き始めた。

「大丈夫、あいつはそんな簡単に死ぬような奴じゃない。」

みんな同じように頷く。うん、あんなことで死ぬ訳がない。死んじゃいけない…。

A C T VII 「GELVES」

S60. 21. AUG <<H20. 13. JAN>>

A C T Ⅷ 「FINAL WAR」

ユウがモニターの前でレシーバーを取り上げた。

「フェリア上では発見できません。そのまま宇宙空間を探索します。」

桂木さんとジンくんは、ラオコーンの端末になにやらデータを打ち込んでいる。ラオコーンのパネルは色鮮やかに点滅し、静かな部屋の中で小さな音を立てている。

トリプタンが爆発してしまってからもう10時間が経とうとしている。本当なら今ごろはゆっくりと休んでいる筈なのに、その爆発の中で行方不明になったラムダを捜して、おそらくは誰も疲れていることに気づいていないんじゃないかと思う。

それにしても…、ラムダは…。

「駄目や、考えつく限り捜してみたんやけど、これ以上はあたしの能力が及ばないわ。」

サーミンがヒステリックに叫ぶ。

「レーダーでも無理です。ラムダの姿を捉えることができません。」

落ち着いたユウの声が続く。

「みんな、集まってくれ…。」

ゆっくりと、そして重々しく、オペレーションルーム内にいるあたし達に桂木さんが言った。

「もうラムダのことはしばらく忘れよう。おそらく、あいつはこの次元にはいない。」

「そりゃ、どういうことなの？」

「俺とジンでラオコーンにシュミレーションさせてみた結果だ。ハリーという前例もあるんだ。べつに不思議でもないだろ。」

「せやけど…。」

ジンくんの顔色が青い。桂木さんの口調もどことなく変だし、サーミンが何か言いたくなるのもよく分かる。

「桂木さん、ラムダは生きている？」

「ハリーだって無事に帰って来たんだ。大丈夫さ、あいつを信じるんだよ。」

あたしの瞳に真っ直ぐに飛び込んでくる視線。嘘をついている顔じゃない。でも…。

「うん、分かった…。」

もし…、もしもラムダがあたし達の所に帰ってくるものならば、その日を待ってみるのもいいかもしれない。だとしたら、あたし達にはまだ他にやるべきことがある。

「了解、ラムダのことはひとまず忘れるから、ラオコーンのもう一つの解答を教えてください？」

「もう…一つの解答？」

他の人達は意味が分からないって顔をしている。でも、明らかにジンくんはあたしの言葉に反応を見せた。桂木さんの様子からすれば、まだ何かを知ってて隠している筈。

「レイコ、ラオコーンのもう一つの解答って？」

「さあ、それは桂木さんかジンくんに聞いてみないと。」

サーミンに大袈裟な身振りで答えると、サーミンはキッと桂木さんを睨みつけた。

「シグマ、今度こそは…。」

サーミンの声、低くくぐもって最後まで聞き取れない。精一杯感情を押さえつけている感じ。

「シグマ…。」

他のみんなも一斉に桂木さんを見る。桂木さんは静かな瞳でサーミンに微笑みかけると、力強く頷いてみせた。

「サーミン、俺はラムダと約束したんだ。もう、大丈夫だよ。」

一人一人確かめるように全員に頷いてみせる。

「ジン、説明してくれ。」

「はい…。」

ジンくんはまだ青い顔色のままフラッと立ち上がる。今にも倒れそうな雰囲気、慌ててジェニーがジンくんの身体を支えた。

「ありがとう。でも、大丈夫。」

ジンくんはジェニーのその手をやんわりと断ると、危なっかしい足取りでラオコーンの前まで来た。

「さっき、シグマとシュミレーションしている時にある共通点に気がついたんだ。トリプタン爆発の際、どんな条件を与えても必ず出てくる現象に…。」

「ジン、時間がないかもしれない。結論だけでいい。」

「あ…、はい。」

あーらら、駄目だわ。ジンくんの意識、全然ここにはないんだもん。

「現在トリプタンが爆発したとされる空間で、次元層の亀裂が発生しています。この亀裂は三次元空間全体に広がっていて、このままでいけば約六時間後には宇宙的規模の次元地震が起こります。その確率は98.5%とラオコーンは言っています。」

ほとんど事務的に言い終わると、スーツとその場にうずくまってしまった。ジェニーがすぐ駆けつけてジンくんを助け起こす。だけど、他の人は誰もその場から動かなかった。いや、動こうとはしなかったというべきか。

「じょ…冗談じゃない、俺達は何のためにトリプタンを倒したんだ。なあ、シグマ、俺達はどうやってもトリプタンには勝てないのか？」

「アトリー…。」

桂木さんもアトリーに返す言葉が見つからないのか絶句している。

「それは違うわ！アトリー、そんなことはないわよ。ただ、この戦いは終わっていないだけ。捜すのよ、この戦いを真に終わらせる方法を、真にトリプタンを倒す方法を。」

そう、まだ終わっていないのだ。いいえ、むしろこれからの方が大変かもしれない。あたしはなんとなくトリプタンの最後の言葉を思い出した。

「レイコの言うとおおりや。この戦いはまだ終わってないよ。まだ諦めたらあかんて。」

「だが、どうやって…？」

アトリーのこの言葉は、そのままみんなの気持ちとなって、最後にはみんな一斉に桂木さんに注目する。

「方法が無い筈はないんだ。まだラオコーンは解答を出していない。いないが…。」

桂木さんも苦しそうな顔。桂木さんが対策を言えないということは、かなり深刻な状況であることをみんな察知した筈。その先にある台詞の続きをみんなは自分自身に言い聞かせるようにして飲み込んだ。

「とにかくラオコーンが解答を出さないことにはな。ユウ、悪いがラオコーンの方を頼む。」

桂木さんは立ち上がると、あたしに合図を送ってオペレーションルームを出て行った。

ユウはチラッとあたしを見て、何か言いかけて…、でもクルッとむこうを向いてスクリーンの前に座ってしまった。ラオコーンの前ではなく、いつものユウの指定席に…。ユウにラオコーンを操作できる能力がある訳でもなく、当然それを知っている筈の桂木さんの真意は図りかねるものの、他にいい方法がないのも事実なんだよねえ。

ラムダ…、お宅さえいまここにいてくれたら…。

あー、やめ。そんなもんいくら悩んだところで結論が出る訳でないし、あたしがここでいくら悩んだってどうせ答えは出ないんだ。さあて、しょうがないことはひとまず忘れることにして、桂木さんの手伝いでもするかなあ。

「レイコ、シグマのところに行くなら、あたしも行くわ。」

「な、なによ、どうしたの？」

サーミンの瞳が少し紫がかって見える。この瞳には逆らっちゃいけない。

「あたしも訊きたいことがあるんよ。どうせフリールームやろ。行こう。」

あちゃあ、サーミンったらあ。まずいわよ、桂木さんはあたし一人を呼んだんだろうし…。

「ん、どうしたん？行かないん？」

「だってねえ…。」

たまんないなあ、もう…。他の人たちはわざとなのか全然こっちに関心を払わないし。

「大丈夫よ、あんたらの邪魔はせんから。」

あーん、言葉はあくまでも優しいんだけどお、やっぱり瞳が怖い。ニッコリ笑ってあたしの腕を強引に掴む。

「分かったら行くよ。」

うう、サーミンには勝てない…。

あたしはサーミンに引っ張られたままフリールームのドアを開けた。

「あのなあ…。」

サーミンを見た瞬間の桂木さんの顔、あたしが予想していたとおりの表情を作った。

「あたしがいると何か不都合でも？」

「あー、分かった、分かった、サーミンも一緒に手伝ってくれ。」

やっぱり桂木さんもサーミンにや逆らわないことにしたらしい。

「で、いったい何を企んでいる訳？」

「企むってほどの物じゃないけどね。ちょっとした爆弾を作ろうかと思ってさ。」

「ばくだん？」

あたしとサーミン、口を揃えてそう繰り返す。

「まあね。と言ったって爆薬を詰めてドカンっていういわゆる普通の爆弾じゃあないけどね。」

「普通の爆弾じゃないって言うത്？」

「ESP爆弾とでも言えばいいのか、つまり精神エネルギーを利用して破壊力を得るって類のもの。」

どうも難しくて分からないや。なんで今さらそんな爆弾を作らなきゃなんないのか。ううん、どっちかって言うと、なんで今になってこんなことを言い出したのか意味不明。基地に戻ってきてからというもの、桂木さんのシールドが強くなっていて、桂木さんが何を考えているのか全然分かんなくなっちゃった。他の人たちもそう。あたしの能力がはっきりと分かった途端、なあんとなく距離ができたみたいで、必要なこと以外はなるべく話さないようにしているのが分かってしまう。

仕方が無いっちゃあ、そうなんだけど、自分の運命なんてものがあるんなら、ちょっとばかり恨んじらいそ。

「シグマ、あんたねえ、今のこの状況を分かってるん？」

「分かっているさ、サーミンよりは…な。」

サーミンの呆れた口調を軽くかわして、ニヤッと意味ありげに笑ってみせる。でも、桂木さんがこういう態度を示すということは自信がある証拠でもある。

「次元の亀裂を元に戻すには、俺の考えじゃただ一つ、ある一定以上のエネルギーをあの空間にぶつけてやる以外にはない。ただ、おそらくは普通の物理的なエネルギーじゃ必要なエネルギーを得ることはできないだろう。それで…。」

「分かった！それでレイコの能力を利用して…。あれっ？」

「どうしたの？」

サーミンが急に何かを思い出したように言葉を切ると、妙な顔つきで桂木さんの顔を見つめている。

「シグマ…、あんたってそんな喋り方をする人やったっけ？」

「えっ？」

桂木さんの顔、一瞬キョトンとした表情になり、その後ブワッと真っ赤になっちゃった。

「な、な、な…。」

あはっ、桂木さん、口をパクパクさせるだけで言葉にならない。

「サーミン、駄目よお、この人はこっちが地なんだから。」

「ん、せやけど…。」

「あのね、今サーミンの目の前にいるのは、トリプタンを倒すことを義務づけられたシグマじゃなくて、地球の安めのアパートでちょっと変だけれど普通の大学生をやっている桂木潤って平凡な男の子なの。あたしから見たら、今までの姿の方が異常だったわよ。」

「リ、リン！余計なことを…。」

「事実でしょ。」

桂木さんは熟れきったトマトよりまだ赤いって顔で、ウーッと唸ってあっちに向けてしまった。

あたしとサーミン、なぜか同時に顔を見合わせ、互いに相手の呼吸を計ったように同時に吹き出した。

「くっくっくっ…、シグマ、あんたのことがよおく分かったわ。よおし、爆弾作るんの手伝うわ。早いとこやっちゃお。」

サーミンはそれでも笑ったら悪いと思ったのか、苦しそうに笑いを押さえつけながら桂木さんにそう言うと、有無を言わず腕を掴んで研究室にもなっている隣の部屋に引っ張って行っちゃった。

やれやれ、あたしもシリアスな場面は好きじゃないけど、コメディが好きな訳じゃないんだけどなあ。しかもサーミンのペースに巻き込まれるとなると…。ま、おかげで気は楽になったけどね。

あたしが部屋に入っていくと、桂木さんはサーミンの頭に変なリングを付けているところだった。

「その変な機械は？」

「精神エネルギー集積装置。でもなあ、問題はそれを何に集積させるか、それがどうしても決まらないんだよ。」

桂木さん、首をかしげながら次々と装置をチェックしていく。

「ま、とりあえずやってみるさ。サーミン、いいか？」

「いつでも…。」

さすがのサーミンも緊張しているのか、声にさっきまでの勢いが無い。

頷いた桂木さんが装置のスイッチを入れる。ヴィーンという軽い音とともにインジケータの目盛りが上がっていく。一瞬、ビクッと身体を振るわせたサーミン、カッと目を大きく見開くと瞳が緑色に光る。

「サーミン、大丈夫？」

でも、あたしの声なんかでんで耳に入らないって感じで、瞳の色を緑から紫、そして橙から真っ赤に…。

ブォン…！シュー…。

サーミンの瞳が真っ赤になった瞬間、インジケータが目盛りいっぱいになり振り切れて、機械は妙な音とともに煙を吹いて停止しちゃった。

「ゴホッ、ゴホッ、シグマ、どうしたんや。失敗したんか？」

「あ、ああ、やっぱりエネルギーを蓄えられるだけの容量がこいつになかったんだ。サーミンのエネルギーだけで耐え切れなくなると、他の入れ物を捜さないといけないな。」

「いけないな…ってねえ。そんなに落ち着いていられる状況なのお？」

「ま、他に方法がない訳じゃないし、それよりラオコーンの解答がそろそろ出る頃だろ。」

あのねえ、元も桂木さんに戻ったのはいいけどさあ、なにもそんな楽家になんなくてもいいじゃない。

そのとき壁のインターホンが鳴った。

「シグマ、至急オペレーションルームに来て下さい。」

ユウの声が響く。

「ほらな！」

桂木さんはニヤッと笑ってあたしの肩を叩く。サーミンはその様子を見ていて、呆れたように肩をすくめてみせた。

「もう、分かったわ。早く戻りましょ。」

あたし、桂木さんに対する認識が変わりそうな気がするわ。

「そうでもないさ。」

えっ、あー、あたしの心を読んだ？

「レイコ、シグマ、あの足音、何だと思う？」

「えっ、えっ、ええーっ！」

サーミンのひきつった顔。あ、とつても嫌な予感がする。

「何だよ？」

「あの足音、この基地内にあんな地響き立てて走るものって他に何がいると思うの？」

「まさか…、ウィリー？」

桂木さんが言い終わらないうちに正面からクマぐらいの大きさのウィリーくんがこっちに向かって走ってくるのが見えた。時折聞こえてくる声はおそらくビュレットのもの。この突然のできごとにあたし達三人とも、逃げようとか避けようとか考えつかずにその光景をボーッと見てしまった。

「あのさあ、危ないやない？」

「しかし、今さらどこに逃げろと？ウィリーの身体は通路いっぱい広がっているみたいだし。」

「いいわ、あたしがやるわよ。」

あたしはサーミンと桂木さんを守るように前に出ると、精神を集中してウィリーくんを睨みつけた。でもねえ、正直言っちゃって自信ないんだよねえ。あたしの能力がウィリーくんに通じりゃいいけど…。

「ウィリー！ 停まりなさい。」

ウィリーの鼻先に壁を作った…つもりだった。ウィリーは何の苦もなく突き抜けてくる。

「おい、リン…。」

「話しかけないでよ。自信失っちゃうじゃない。」

あたしはこれまでのウィリーくんの行動を必死に思い出そうとしていた。彼が大きくなる理由は…。

もう目の前まで迫ってきている。もう考えている余裕すらない。とにかく何かやらなきゃこっちが危ない。ほんの数秒間でこれだけのことを頭の中で整理すると、大きく息を吸い込んで、あらん限りの大声で怒鳴りつけた。

「ウィリー！」

まるで魔法が解けたような光景だった。一瞬にして小さくなったウィリーが足元を駆け抜けていく。

「フーツ、助かった。ウィリーの下敷きになってあの世行きなんて、みっともいもんじゃないからな。」

「クウン…、クウン…。」

一度駆け抜けて戻ってきたウィリーくんは、小さな身体をあたしの足にすり寄せてくる。まるで自分が被害者って顔して。

「ウィリー、ウィリー、あー、レイコお姉さん。あの一、大丈夫…ですよねえ。」

ウィリーくんのあとを追いかけてきたビュレットがやっと追いついてきて、状況を見た途端に思わずあどさつしている。

「ビュレット、状況を説明してくれん？」

「え、あー、そのお…。」

「怒りゃしないわよ。正直に話しなさいゆうてんの。」

「うん、あのお、はっきり言って分かんないの。いきなり何かに怯えたように落ち着かなくなっちゃってえ…。」

「ね、それっていつ頃から？」

「うーんとねえ、でっかくなつたのはついさっきなんだけど、だいぶ前からおかしかったんだよねえ。んー、たぶんトリプタンがいなくなった頃だったと思うんだけどお。」

たぶん、ウィリーくんのことだから次元層の亀裂に感づいたんだ。

「桂木さん…。」

「今はウィリーに構ってられる時じゃない。それより早く行こう。」

もう…、仕方がない。

「ね、ウィリー、この惑星は、この宇宙は、きっとあたしが救ってみせるわ。だから、もう何があっても暴れないでね。ねっ、分かった？」

小さいウィリーくんの頭をコツンとこずいてやると、あたしの話しが分かったのか分かってないのか、小さく低くクウンと鳴いて身体をすり寄せてくる。

「じゃ、あとは頼むわよ。」

サーミンを気にしながらこっちを見ているビュレットに、そのままウィリーを抱き上げて渡してやった。

「サーミン、行こう。」

やや遅れ気味に頷いたサーミンとともに走り出す。

「あんなんでもよかったんか？」

「大丈夫よ、それより今は次元の亀裂を何とかする方が先だもの。」

「やっぱり…。」

「ううん、なんでもないんよ。」

妙な笑顔で首を振りながらオペレーションルームのドアに手をかけた。やだっ、なんか突然サーミンがもう一人のあたしに見えたじゃない。

「アトリー、次元の亀裂は？」

「おう、やっと来たか。いまシグマとも話していたんだが、まあこれを一緒に見てくれ。」

あたし達より先に来てくれていた桂木さんがユウに合図を送る。ユウは手馴れた感じでパネルを叩くと、小さなスクリーンにフェリア上の空間が映し出された。スクリーンの中央では十文字に切り裂かれた空間がはっきりと映っている。

「それでラオコーンの解答は？もう出たんでしょ？」

「まあな。ユウ、もう一度ラオコーンの解答を二人に話してくれ。」

「はい。」

今回はジンくんがいない分、なんでもユウがやっているわね。

「あの次元の亀裂を元に戻すには、トリプタンが爆発した時と同じだけのエネルギーをあの空間にぶつけることができれば、あるいは互いのエネルギーが相殺しあって元に戻るかもしれないと…。」

「なあに、そのあるいはっていうのは？」

「えーっと、あの、これを試みたところで成功する確率は30%に満たないんです。でも…。」

「他に方法はない…という訳？」

「はい。」

桂木さんがニヤニヤしながら自分の頭を指しているんだけど、今そんなことを自慢されてもしよーもないと思うんだけどな。

「それでそのエネルギー値は出ているの？」

「一応はな。だけどそれを知ったからってどうにかできる値じゃないんだよ。」

「そんなに大きいの？」

「このラオコーンとゼウスの全エネルギーを足してみても、それでも十分の一がいいところだな。」

アトリーが示したエネルギー値を、桂木さん、サーミン、あたしがヒョイと覗き込んで、そして一斉に吹き出してしまった。

「なあんや、たったそれだけ？」

「えっ？」

「たいそうなことを言うからもっと大きいのかと思った。」

「あとの問題はそれを入れる器だな。」

「えっ？えっ？」

アトリーとユウ、目を点にしてあたし達の顔を見比べている。おそらく、ゼウスの人にはあたし達の言わんとしていることは分かってしまっただろう。理解できないのはこの二人とメディカルルームにいるジェニーとユーリ。

「どういうことなんですか？」

だからユウのこの質問は当然だとも言える。でも、おそらく口で説明しても簡単に理解できるものでもないと思う。

「心配しなくていいわ。このエネルギーを得ることはそう難しいことじゃないってこと。」

そして、そのエネルギーを収める器を得ることもね。

「ユウ、このカードに正確な情報を入力してやってくれる？それから桂木さん、例の集積装置を直接ラオコーンにつないで。」

「何なんだ、そのカードは？」

「あたしの切り札よ。」

カードを調べたがっている桂木さんを急かし、あたしは意識的に精神エネルギーを左手に集め始めた。ラオコーンは機械的な音をことさら強調させて、あたしの切り札に情報を与えてくれている。

「リン、これでエネルギーはラオコーンに流れるが、大丈夫か？」

「うーん、たぶん大丈夫じゃない？」

正面の緑のランプがカードに情報を与え終わったことを示している。あとはその情報に見合うだけのパワーを与えてやればいい。だけど…。

あたしか、ラオコーンか、カードか、三つのうち一つでもバランスが崩れると、たぶんこの賭けは成立しないだろう。あたしは大きく深呼吸してラオコーンを見つめた。

「やるわよ…！」

あたしの声で桂木さんが集積装置のスイッチを入れた。ヴィーンという唸りをあげてあたしの左手に集められたエネルギーを奪っていく。あたしは意識的に力を送るようにイメージを作る。集積装置で変換されたエネルギーは、ラオコーンを媒体として切り札に集積されていく。

瞳に霞がかかったような感じになってきた。だんだん視界からカラーが消えていくのが分かる。

「レイコ、あんな大丈夫？顔色が悪くなってきたやない。」

大丈夫…と答えようとしたんだけど、駄目だわ、気が遠くなってきちゃった。駄目、ここでバランスを崩してしまったら…。あたしの目の前には完全なモノクロの世界が広がっている。

その時、あの声が耳元で聞こえた。

「ご苦労さん、あとは任せといて…。ねっ！」

えっ？もしかして、レ、イ、コ…？

思考力が落ちてきた。身体が自由がきかない。もう駄目…。深い眠りに落ちる寸前、もう一人のあたしが微笑んでいるのが見えた気がした。

混沌…、あたしの目の前にあるのは混沌だけ。何だったんだろう、あたしには何か考えなきゃいけないことがあった筈なんだけど。なあんか頭がポーンとしちゃって、身体がフワフワしちゃって、なんか夢を見ているみたい。

夢…、夢なの…、夢なんかの筈はない…。

誰？誰なのよ、あたしの前で笑っているのは。

あたし？あたしじゃない。あたしの訳はないじゃない。あたしはここにいるのよ。あなたは誰？あなたは何であたしと同じ顔をしているの？

助けて…、助けて、桂木さん！

「桂木さん！」

「はいよ…、大丈夫か？」

えっ、あれっ、なんだあ。

「桂木さん…？」

「悪かったな。けどおかげで助かる目処がついたよ。」

「知っていたの？あたしの能力。」

「初めから予想はしていたよ。だからこそ、敢えてリンに希望を託したんだ。でなきゃ誰がこんな危ないことをやらせるか。俺のリンに…。」

これが精一杯の気障な台詞…かな。でも、今ならあたしも素直に甘えられる。

「好、き、よ…。」

「莫迦…。」

あたしの髪をクシャッと撫でて、照れくさそうにむこうを向いてしまった。

「シグマあ！計算が終わったみたいだぜ。」

アトリーの声。あ、ここオペレーションルームの隅っこだったんだ。

「じゃ、もう少し寝ていろよ。」

「あん、でもお。」

うわあ、身体が重い。半分も身体を起こさないうちにまた倒れてしまった。まるで最初にフェリアに来た時みたい。

「いいから、寝てろって。」

あたしを押しとどめてニコッと笑う。

あーあ、せめて身体が自由に動けば…。

「動くわよ。」

えっ？

「あたしよ、忘れたの？」

鈴子…、もう一人の鈴子ね。

「レイコ、ごめんね。もう少し早くサポートしてあげればよかったんだけど…。」

分かっているわよ、気にしなさんなって。それより、当然手伝ってくれるんでしょね。

「まあね、ここまでずーっとあなたに任せっぱなしだったし、せめて最後の始末だけでもやらせてもらうわ。」

そう言うとスーッと鈴子の気配が消えた。

やだ、何、今の台詞。ちょっと、鈴子、いったい何をする気？

不思議なことに、鈴子の気配が消えた途端、身体が軽くなってきた。急に現実があたしを包み込む。起きなきゃ！

ウーンと思いきり手足を伸ばしてみる。よし、大丈夫。

「シグマ、俺が行くよ。俺ならいつでもテレポートできるし。」

「だけどな、リョウではこのカードを使いこなせないだろう。やっぱり駄目だよ。」

みんなしてカードの取扱いに悩んでいるところらしい。そうだろうなあ、このカードのことをフェリア人は理解できないだろうし、地球人は理解できても使えないことを知るだけだろうしね。このカードの能力を100%引き出すことができるのはあたしだけ。あたししかいない。

「あたしがやるわよ。」

「リン！大丈夫なのか？」

「無理せんほうがええよ。」

みんなの視線が一斉にあたしに注目する。

「そのカードについてはあたしが一番よく知っているわ。当然やらせてもらえるんでしょね。」

えっ？あたしの意思とは関係なしに口が勝手に動いてしまう。うわっ、手も足も、あたしの意思で動くところなんてありゃしない。

「そりゃあ、レイコちゃんに頼めるんなら、俺達もその方が助かるけどな。身体のことを考えたらそういう訳にもいかないだろ。」

「アトリー、あたしの心配をする前にもっと全体的なことを考えなきゃ、そんなことじゃジュールの再興なんてできないわよ。」

わあ、なんてことを言うのよお。

「そのカードは一種のESP集積回路になっているのよ。エネルギーを100%解放させるのはあたししかできないわ。ジュン、カードを返してちょうだい。」

「リ…、レイコ、帰ってこいよ。」

桂木さあーん、気がついてよお。これはあたしじゃないのよお。

「じゃ、アルテミスを借りるわね。」

あたしは桂木さんの手からカードを受け取ると、呆気にとられているみたいなみんなに向かって手を振ってみせる。みんな、誰もあたしの行動を止めようとしな。あたしの足はそのまま勝手に格納庫まで歩いて、勝手にアルテミスに乗り込む。そして、まるで昔から操縦していたかのようにスーッと発進させた。

今日のフェリアの空は少し薄黒くて、あっちこっちに次元の亀裂が広がっているのが見える。そして、アルテミスはその中でも一番大きい亀裂に飛び込んでいく。

あたしはだんだんあたしの身体を独占している者の正体に気づき始めていた。ううん、本当は最初から知っていたのかもしれない。正確には思い出したというべきなのかもしれない。

鈴子…、あなたの正体を…。

「あら、分かっちゃった？でも、悪いけどもう少しだけ付き合ってもらおうわよ。この後始末だけは、あたしの手でやりたいのよ。」

アルテミスは同じ場所を何度もグルグルと旋回している。ここがトリプタンが爆発した空間。鈴子はスーツと右手を高く差し上げる。その指には一枚のカード。

鈴子…、あなたは…。

「レイコ、これで本当のさよならだわ。本当にいろいろとありがとう。そして…。」

最後の台詞が聞き取れなかった。鈴子はカードとともに亀裂の中に飛び込んだ。彼女が持っていた凄まじいエネルギーの渦が閃光となって軌跡を描いている。

ようやく自由になった身体で、あたしはアルテミスを反転させた。実際、あたしにはそれしかできなかった。一瞬早く亀裂を飛び出したあたしの背後から激しい爆風が吹き出す。それはこの三次元の世界を元に戻すための爆発。

あたしは其中で、掴まる筈もない意識を掴まえようとしている自分に気づいた。それとともに、あたしが真の意味で能力を解放させたことにも。そして、それをとても素直に受け入れられる自分に驚いていた。

鈴子…、本当にお礼を言わなきゃいけなかったのはあたしの方だったのに…。

アルテミスはあたしの気持ちとは正反対に真っ直ぐとラオコーンに向かっている。そういやあ、桂木さん達は成功したことに気がついているんだろうか。いや、たぶん今ごろはホッとしているんだろうなあ。みんなの嬉しそうな顔を思い浮かべると、なんとなく嬉しくなってこのままずっと飛んでいたい気もする。

「そうそう、お宅が深刻な顔をしたってらしくないだけなんだから、笑っていりゃいいのさ。」

ラムダ…？

空耳…。でも、ラムダならきっとそう言うんだろうなあ。偉そうに、俺は何でも知っているんだって顔つきで、ちょっと気障にそう言うんだ。

だから、あたしはちょっと拗ねる感じで悪態ついて…。

あたしがもう少し早く自分の能力に気がついていたら、あんたを助けることができたかな。

ははは…、やっぱり、らしくないね。

「こちらアルテミス、ただいまよりラオコーンに帰還します。」

A C T VIII 「FINAL WAR」

S60. 10. OCT <<H20. 17. FEB>>

A C T IX 「GOOD-BYE FERIA」

それからの数日は、あたしがフェリアに来てから一番忙しかったような気がする。と言っても、あたし自身はべつにたいしたことをやっていた訳じゃないんだけどね。

アトリー達は毎日のようにジュールへ飛んで行って、各地に散らばっている筈のジュール人達を捜していた。中にはラオコーン並みの設備を持っている地下組織もあることが分かって、通信システムで連絡を取り合ったりもしていた。

尾田さん達は地球に帰る準備とかでゼウス基地に戻ったきりで、あれから一度もラオコーンには姿を見せていない。時折、サーミンが気にして連絡をくれたけど、いったい何をしているのかは教えてくれなかった。

桂木さんはラオコーンの研究室に閉じこもってばかりで、食事時ぐらいしか会うことができなかった。どうやら転移装置を修理しているらしいんだけど、はっきり言って今のあたしなら地球に転移するくらいの能力はあるんだけどなあ。でも、あたしの方からそのことを桂木さんには言いたくない。

あたしの心のどこかでは、まだラムダと鈴子がここに戻ってくるのを待っているんだよね。だから、まだここにいたいあたしとしては、わざと帰れることを黙っている。なので、そんな忙しい基地の中で、あたしだけが何もすることがない。正確には何もさせてもらえない。ということで、あまりにも暇そうにしているあたしを見かねたのか、アトリーがあたしに頼んだのがビュレットとウィリーくんのお守り。

あたしも退屈していたし、みんなが忙しそうにしているのに一人だけ何もしていないことへの後ろめたさもあったので、ちょうど良いと軽く引き受けちゃったんだけど、はっきり言わせてもらおうと、この一人と一匹の相手をするのはトリプタンを相手にするより大変だと思う。もしかすると早まったかもしれないとちょっと後悔もしている。

あたしが未だにこの基地の構造をよく覚えていないのをいいことに、あの子達はあたしをあっちこっちへいいように引きずり回すんだ。お願いだから、こんなところで鬼ごっこなんて勘弁して欲しい。で、あまりにも邪魔くさかったし、自分でもいい機会だと思ったし、思い切って髪をショートヘアにしてしまった。

「レイコさん、あの、シグマが呼んでいますけど…。あのお、どうかしたんですか？」

「はは、ユウったら…」

「べつにね、ほら、ビュレット達の相手をしていると邪魔でしょ。だ、か、ら。」

「でも、もったいないですね。せっかくきれいな髪だったのに…」

「ありがとう。で、桂木さん、何だって？」

「さあ…。でも、かなり喜んでみたいだから、転移装置の修理が終わったんじゃないですか。」

「ん、じゃ、行ってみますか。」

ユウにはビュレット達だけのせいにしちゃったけど、本当はもう一つ自分なりにけじめをつけたかったというのもある。まあ、いいか、嘘は言ってないもん。

ここ数日間というもの桂木さんが閉じこもっていた研究室に入っていくと、中ではアトリー達まで加わって大騒ぎしていた。

「これは何の騒ぎなの？」

「リン！ やっと新しい転移装置が完成したんだ。これで地球に帰れるぞ。」

「新しい…？」

「ああ、ただ修理するんじゃ、またいつ壊れるか分からないしな。思い切って基本から構成し直してみたんだ。」

だから時間かかっていたのか…。ようやく帰れるんだ。でも、どうしてだろう、まだここにいたいという気持ちの方が強いってことに気がついた。

「どうした、嬉しくないのか？」

あたしの表情を読んで、桂木さんは心配そうにあたしの顔を覗きこむ。ううん、桂木さんだけじゃない、みんなが心配してくれている気持ちがゆるやかに流れ込んでくるのが分かる。

「ううん、そういう訳じゃないけど、帰れるって分かったら、なんかもう帰っちゃうのかなって、そんな気がしてきて…。」

半分は本当、半分は嘘の入り混じった複雑な気持ち。あたし、本当は一日でも一時間でももっとフェリアにいたいって思っている。でも、やっと帰れるんだって心のどこかで喜んでいるのも事実。

「そう言えば、ショウ達もそろそろ地球に帰るって言ってたな。ちょうど良かったじゃないか。」

アトリーがいつの間にか背後に立っていて、そっと肩に手を置いた。あたしを心配してくれている気持ちが手からも流れてくる。

「そうだな、ユウ、悪いけどゼウスのほうにむこうの状況を訊いてみてくれないか？」

「はい。」

桂木さんには分かっちゃったかな、あたしの気持ち。

「リン、仕度だけはしておけよ。」

正直に言えば、自分の生き立ちに気がついてしまった今の自分に地球で今までどおりの生活ができるか自信がない。でも、一度は帰らないといけないということもよく分かっている。もしかすると、桂木さんは初めから知っていたのかもと思うところもあるんだけど、どうしてもそこだけは心を読み取れない。

うーん、気が重いなあ。自分のフリールームに戻っても、べつに仕度しなきゃならないほど荷物がある訳じゃないし。でも、このまま何もしないと落ち込んじゃいそう。足は何の気はなしに格納庫の方へ…。なぜかこの基地の中であたしが迷わずに行かれる唯一の場所。

あーあ…。

他にどうすることもできないから、そんな言葉しか出てこないじゃない。こんな時にラムダがいてくれれば悪態がつけるのに。このままどっかへ行っちゃおうかなあ。ちょうどヘルメスがあるし。

「どうせなら、ヘルメスじゃなくてオーロラの方がいいと思うけどね。」

えっ？

「ここに来るのにオーロラで来て良かったよ。」

「尾田さん！」

そこにいることにぜんぜん気がつかなかったわ。あたしのすぐ後ろに立っていたというのに。しかし、尾田さんにまで心を読まれるんじゃ、あたしも相当参っているんだわね。

「行かないのか？それとも、僕じゃシグマの代役にならないかな？」

「う、ううん、そんなことない。ちょっと驚いただけ。」

尾田さん、ちょっと首を傾げて微笑む。

「じゃ、行こうか。」

基地の外に停めてあるオーロラを見た途端、なぜか急に初めてラオコーン基地に来た時のことが頭の中に浮かんた。あの時は見るもの全てを疑ってかかっていた。これは全部夢なんだと思っていた。ただ家に帰りたいとそれだけを思っていた。

「それでいいんじゃないかな。レイちゃんがそれだけ成長したということだろ。なにも難しく考えることはないさ。そんな自分があったということさえ忘れなきゃ。」

「尾田さん…。」

「僕の能力のことは話したことがあったっけ？」

「ううん、でも、たしか予知能力。」

「そう、だから僕では本当の意味でみんなを引っ張っていくことができなかった。僕は他の人以上に未来の可能性が見えてしまう。でも、だからこそ僕には未来が見えていないとも言える。」

どこまでも続く荒野を、本当にあてもなくオーロラを走らせる。

「僕には自分の本当の存在理由を、ついさっき知ったんだと言ったらどう思う？」

「どう思っ言われても…。」

「じゃあ、質問を変えよう。このフェリア、今見てどう感じる？」

うーん、尾田さんの言っている意味がよく分からない。尾田さんはどこまで知っていて、あたしに何を教えたいんだろう。あたしの能力がどんなに他人より強くても、自分にはない能力のことまでは理解しようがない。

「どう？」

あたしが黙っていると重ねて訊ねられる。

「そうねえ、印象が変わったのは確かなんだよね。どうとは言えないんだけど。」

雰囲気というのかな、今のフェリアには生気を感じる。以前のフェリアはどことなく生きている感じを受けなかった。

「僕には分かるんだ、フェリアが笑っているのが、フェリアが喜んでるのが。ほら、見てごらん。」

尾田さんが指差した前方には、地平線スレスレにイエローザルが浮かんでいる。それがスーッと沈んで、あっという間に濃い黄色が空いっぱいに広がった。いつの間にか反対の地平線から顔を出したジュールまでその光が届くと、いつものグラデーションを作り出す。

「あら・・・？」

何かが違う。いつもの・・・じゃなくて、いつも以上だわ。見慣れたいつものグラデーションの比にならないほど数段きれいなグラデーションが見る見るうちに広がっていく。

「アトリーには聞かなかったかい？ザルが三つとも揃う日のこと。」

あ、ああ・・・、そんな話しをしていたような気がする。たしか、普段はジュールの影に隠れているザルが、なぜか一年に一度だけフェリアから見える日があって、その時だけ三つのザルが揃って見えるという。

そうこうしている間にもジュールの両側からピンクとライトグリーンの光が割り込んできた。フェリアの空に四つの光が舞っている。それに呼応するかのようにはオーロラの車体が輝く。もう、これは口では言い現すことのできないほどの美しさ。

「驚いた・・・。これ、まるで空が生きているみたい。」

感動・・・、絵も知れぬ感動があたしの身体を駆け抜ける。

「フェリアは生きているよ。おそらく、レイちゃんに感謝でもしているつもりなんじゃないかな。」

「そんなあ・・・。」

「そうっておけば？」

「またあ・・・、第一、尾田さん、知っていてあたしをここに連れて来てたくせに。」

「そう思ってくれるなら、僕の存在理由も立派に役立ったという訳だ。」

あっ、そういうことかあ。尾田さんの存在理由って・・・。

「そろそろ帰ろうか？」

頷いてハンドルを大きく右に切る。オーロラの車体が輝いたのはほんの数秒のことで、今はもう元のシルバーに戻っちゃったけど、あたしの心には深く刻み込まれた筈。きっと、この感動は忘れない。

でもね、もし、フェリアが最後の別れのつもりでこれを見せてくれたんなら、ちょっと寂しい気もするな。だから、尾田さんの言う通り、あたしの感謝の印としてを見せてくれたんだと思うことにしておくわ。

あたし、本当にここに来てよかったって思う。みんなと知り合いになれたし、今まで知らなかった世界も見ることができたし。何にもまして自分自身が何者なのかを教えてもらえた。一番とはまだ言えないけど、あたしにとって二番目に愛すべき大地。

あー、さっきまであった暗い気分なんて完全に吹っ飛んだじゃった。もう誰でも感謝したいような気分。だけど、取り敢えずは・・・。

フェリアの空にさようなら！

A C T IX 「GOOD-BYE FERIA」

S60. 13. OCT <<H20. 25. FEB>>

A C T X 「EPILOGUE FERIA」

東京、新宿・・・、ここは日本の大都市。煩すぎるほどのネオンサイン、やたらと多い人間たち。だけど、今日はそれが妙に嬉しい気がする。あたしは西口にある歩道橋の上にあった。見上げれば超高層ビルがニョキニョキ生えていて、まるで今にも歩き出しそう。フワッと冷たい風が通り過ぎて、あたしの髪をそっと撫でていく。短くなってしまったあたしの髪は、昔ほど踊ったりはしない。

「そんな所にいつまでも立っていると風邪を引きますよ、お嬢さん。」

あたしが振り向くと、いつの間に来たのか桂木さんが立っている。

「嫌だ、何よ、その恰好。」

桂木さんは、真っ白なスーツに真っ赤なバラを胸に挿していて、およそ気障以外の何者でもないって恰好をしている。

「似合うか？優記に借りてきたんだが、ちょっと派手だったかな？」

そりゃあ、借りた相手が悪いわよ。優記から借りたんじゃあねえ。

「ま、いいわ。で、どこに行くの？」

「まあ、任せておきなさいって、こう見えても新宿には詳しいんだ。」

うーん、いったいどうしちゃったんだろう。よもや桂木さんの口からこんな台詞が聞けるなんて思ってもみなかった。三日前にフェリアから帰って来てからというもの、妙に明るいよねえ。まさかこっちが地という訳でもないでしょうに。いったい何を考えているんだか、どう考えても理解できない。

桂木さんは勝手にどんどん先に歩いていくと、とある高層ビルの地下にある高そうなレストランへとあたしを案内する。

「ちょっと、こんなレストランじゃ高くない？大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、高そうに見えるけどそうでもないんだ。なんたって地下にあるからね。」

あのねえ、誰が駄洒落を聞きたいと言ったのよ。あたしに冗談を言うためだけに食事に誘った訳じゃないでしょうに・・・。

でもねえ、なあんか変な気分。桂木さんが何か喋るたびに、何て言ったらいいのかなあ、彼の気持ちがぜーんぶ伝わってくるような感じがする。あたしの能力は地球に戻ってきてから消えた筈なんだけど、ちょっと精神集中すれば、まるで今でも全部見えちゃいそうなの・・・。

ボーイさんがあたし達を奥のテーブルに案内してくれて、営業用のスマイルでお辞儀をして戻っていく。

「リン、どうしたんだ？そんな変な顔をして。」

あたし、呆然として椅子に座った。

嫌だ、彼の心の中が丸見え。あたしの能力は全然無くなっていない。

「おい、具合でも悪いのか？」

駄目、止められない。このままじゃ暴走しそう。

「桂木さん、ごめんなさい・・・。」

その瞬間、あたしは自力で転移した。自分の能力を制御できる空間に・・・。

でも、あまり長くいる訳にもいかないわねえ。なんたって宇宙空間だから、シールドがそんなに長くはもたないだろうし。目の前に見えるフェリアとジュール。もう見ることはないだろうと思っていたんだけど。

大きく深呼吸をして、あたしはあたし自身に意識を集中させた。あたしの能力は地球では必要ない。いつか、また必要になるその日まで鍵をかけてしまおう。

キーワードは、フェリアとジュール。

戻ろう・・・、あたしの本来いるべき空間へ。帰ろう・・・、桂木さんが待っているところへ。

んー、いい気持ち、もうちょっと寝ていようかなあ。あ、でも今日は優記んとところに寄らなきゃいけないんだっけ。ま、仕方がない、起きますか。あたしはベッドの中で思い切り伸びをすると、いち、にいの、さんで勢いよく跳ね起きた。手早く着替えてベッドを直すと、まずは冷蔵庫の中を覗いてみる。

ハム、タマゴ、レタス、オニオン……。ふーん、ま、順当なところでハムエッグだわね。そんじや、タマゴとハムと……。

今朝の食卓は、クロワッサンとハムエッグ、それに特製のオニオンスープ。ガラスのテーブルに並べて花なんか飾っちゃう。うん、今日は上出来。なかなか優雅な朝食ではないですか。やったね！

時計を見ると7時半を指している。ちょうどいいかな。猫のアップリケの付いたエプロンを外して、ちょっと化粧をしてから隣の部屋をノックする。

「ジュン！起きているう？早く来ないと朝食なしだからねえ。」

「んー、今行く。ちょっと待っててくれ。」

相変わらずガタガタ音をさせてドアが開いた。

「よお、おはようさん。」

「おっはよ！」

うふっ、いつものモーニングキス。

「あー！またオニオンスープにしたろ。俺が嫌いなもの知ってて作るんだからなあ。」

うーん、あたしとキスしただけで朝食のメニューを当ててしまうなんて、ジュンのオニオン嫌いにも困ったもんだわ。

「贅沢を言わないの。嫌だって言うんならもう作ってあげないわよ。」

「分かったよ。……ったく、この頃妙につよくなっちゃまって、前の方がかあ良かったのに……。」

「知らないわよおだ。」

ふーん、たしかにね。そりゃ認めざる得ないけど……。

あたしは結局のところ会社を辞めてしまった。優記がうまく立ち回ってくれてたんで会社の席はかろうじて残っていたんだけど、長期間休んじゃって気まずいっていうのもあったし、なんかやりたいものってのが変わってきたみたいだったんで、こっちに帰って来てすぐに辞表を出したんだ。

なんて言うのかな、フェリアっていう特殊な環境を見てしまって、もう普通の社会機構に戻れないって気がしたんだよね。それにあたしの能力のこともあるし……。封印はしたものの、いつまたあたしの能力を必要とするか分からないからね。

でね、今あたしが何をしているかって言うと、なんか小説でも書いてみようかななんて思っている。暇つぶしに書いたエッセイを優記がうちに遊びに来た時に見られちゃって、そうしたら面白いから貸してくれとか言って持って行っちゃって、参ったなあとか思っていたらとある雑誌にそのまま掲載してくれたのよ。しかも、これが意外と高評だったらしく、正式に原稿の依頼が来てしまった。

で、せっかくのチャンスだからね。真剣に小説でも書こうかなと思っている。意外とフェリアのことをそのまま書いたらSFになるんじゃないかなあ。

そうそう、そう言えば、アトリー達はあの後すぐにジュールに移ったそうで、生き残りのジュール人を集めて再建に頑張っているとのことだった。むこうではもうすぐ一年が経つから、どれくらい復興したんだろう。ジンくんにも一度遊びに来いと誘われているし、どこかで時間を作って行ってみたいな。

あたしはフェリアのおかげで大きな能力を貰ったけど、本当はそんなものよりそこで出会った仲間の方が何倍も大切なものであるかに気がついていた。アトリー達ジュール人はもちろん、同じ地球人であるサーミン達もね。

「生まれ変わる。もし、それが出来るんやったら、あたしを仲間と呼んでくれる人達に感謝せなあかんやろな。」

サーミンが別れ際に最後にあたしに残した言葉。その時はサーミンが何を言おうとしていたのか言葉の意味が分からなかったんだけど、たぶんサーミンも同じようなことを感じていたんだと

思う。みんな、フェリアに関わった人達は、大なり小なり何かが変わった筈。今となってはそれはみんな良い方向に変わったんだと認めざるを得ない。たぶん、それもフェリアの力なんだと思う。

あ、でも今回の中で一人だけまるで変わらなかった人がいるとすれば、それは一日中部屋に閉じこもって訳の分からない物を発明しては、あたしにも黙ってジュールへ行ってしまおう潤だろう。だけど、潤にとっては今回のこの事件って何だったんだろう。これって最近よく考えるんだよねえ。

結局のところ、潤は自分の父親の残した汚点を消したかったというのが発端だったんだろうけど、途中からそれだけじゃなくなった筈だし、それがすべて終わった今となっても何も変わらないって言うのであれば、潤が何をしようとしているのかをあたしは未だに理解できていないことになる。

「あー、もう、こんな時間じゃない。」

「こんな時間って…、まだ8時じゃないか。」

「なに言ってんのよ。昨日言っただけじゃない。今日は優記のところに寄るから早く行くって。悪いけど先に出るね。」

「ん、気をつけて行ってこいよ。」

「うん、じゃ、行ってきまあす。」

「あ、リン、ちょっと。」

「ん？」

飛び出そうとしたあたしを潤が呼び止める。

「今日はショウとサーミンが来るんだから、なるべく早く帰ってこいよ。」

「はいはい、分かっていますって、じゃ。」

アパートの階段のところまで走ってくると、周囲に人の目が無いことを確認して、よおし…。気がつくとも視界が変わって裏の駐車場に立っていた。はは…。これは最近あたしが身につけた悪い癖。自分で能力を封じ込めておいて自分で使っているのも困ったもんだけど、結局はこの能力込みで自分を認めなきゃなんない訳で、ついつい便利に使っていたりする。まあ、ほんの小さな能力しか使わないけどね。

あたしのシティは奥から二番目、いつものように並んでいる。潤に後から聞いたんだけど、あの日会社に置きっ放しにしてあったシティを優記がここまで持ってきてくれて、その後もずーっと管理してくれていたんだそう。あたしは軽くボディを叩いてから、ドアを開けてシートに収まる。うん、今日はなんとなくシティの機嫌が良いのが分かる。

「今日も頼むわよお。」

シティに一声かけて、慎重に駐車場から出発。それからカセットボックスに手を伸ばして少しばかり悩む。シューベルトさん…。ううん、今日はシューマンさんにしよう。テープをセットしながら隣の時計を見ると…。うわっ8時17分。優記の家まで約10分、信号に引っかからなきゃ十分に間に合う。

国道沿いのファミリーレストランの横を右に折れて、信号を二つばかり通り過ぎる。コンビニエンスストアを目印に左に曲がると…。いるいる、待ちきれなくなって家の前に立っているわ。

「おっはよお！」

「遅い！少し早めに来て言ってあったろがあ。まったくトロいんだからな。」

「なによお、迎えに来てあげたのに喧嘩を売ろうっていうの？乗りたくないって言うなら、無理に乗れとは言わないわよ。」

「わ、分かったよ。まったく、かわい気が無いたらありゃしない。」

「悪うございましたね。」

「まったくだよ、少しは反省してもらいたいもんだ。」

と、ブツブツ文句を言いながら助手席に乗り込むと、勝手にテープを取り出す。そして、ギンギンのヘヴィメタルにチェンジ。

「ちょっとお、朝っぱらからそんなのかけないでよ。」

「ん…。」

「ちょっとお、聞いてんの？」

あたしは左手でテープを停める。車内にシーンとした雰囲気の流れた。

ん？いつもならこんなことでおとなしくなる訳なんかないのに。

「なあ、今日のこと、本当に行く気なのか？なんだったら俺が断っておいてもいいぜ。」

「な、何言ってるのよ、自分で持ってきた仕事でしょうが。それにね、断るなって言ったの優記じゃないの。」

「でもさあ…。」

「ストップ！あのねえ、あたしはもう心の整理はついてんの。今日は仕事として行くんだから変なことを言わないでよ。そりゃあ、あたしだって行きづらいついていうのは事実だけどさ。」

そう、優記の持ってきた仕事っていうのが、あたしが前にいた会社からの原稿依頼なんだ。

「ちえっ、かなわねえな。なんか、最近妙に強くなっちゃってよ。」

そりゃあ、優記の考えていることなんて、あたしには手に取るように分かるもの。だから、今日だって行けると思ったんだ。優記がどんな気持ちでこの仕事を持ってきてくれたか、それがよく分かったから。こんな能力だけどね、実は随分と助かっている。

出版社の前で優記を先に降ろして、あたしはシティを裏の駐車場にまわす。前にあたしが使っていた区画には別の車が置いてあって、あたしは外来用の空いているところに駐車した。入口の守衛さんに挨拶してトントントンと階段を上っていくと、その2階のフロアがあたしの元の職場。半年前までは毎日のようにここにいたのに、なんか今日はとっても新鮮に感じる。

「やあ、森柄くん、久しぶり。今日はわざわざ出向いてもらってすまなかったね。」

「いえ、編集長もお元気そうで。」

会社の人達は昔のことには誰も触れず、何事もなかったかのような顔で優しく出迎えてくれた。おかげで仕事の打ち合わせもとんとん拍子にうまく進み、そばでヤキモキしていた優記もようやくホッとした顔を見せた。

それから暫く雑談でお互いの近況などを話して、丁寧にお礼を言って出版社を後にする。帰りに自分の家に寄っていけとしつこく誘う優記に、今日は友人が来るからと断ってまっすぐ帰ってきた。

アパートの駐車場にシティを入れる時、アパートの前に横浜ナンバーの赤いパルサーが停まっているのが見えた。もう二人とも来ているんだ。あたしは急いでシティから降りると、アパートの階段を二段抜かしでかけ上る。そして、いつものように自分の部屋の前を通り過ぎて潤の部屋のドアをノックした。

「鍵は空いているよお。」

わあ、懐かしい尾田さんの声。

「おかえりい、結構早かったやない。」

サーミンの声も…。

「うん、すんなりと話しがまとまったからね。あたしが前に勤めていた所だったからね。」

「ふーん、良かったやない、順調そうで。」

「まあ、おかげさまでなんとかかって感じ。ね、ところでサーミンは今は何やってんの？」

「え、ええ…。」

「リン、そんな所に突っ立ってないで座ったって話しはできるだろう？」

えっ？あ…、やだ、あたし、荷物も置かずにそのまま…。

「だってえ、サーミンと会うの久しぶりなんだもん。ね、で、何やってんの？」

あたしは手に持っていたバッグを下ろすと、サーミンの正面に座った。

潤はちょっと肩をすくめて台所に顔を引っ込める。尾田さんはなんとなく必死に笑いをこえらえているようにも見えるんだけど。

「それがあ…、ねえ、笑わんといてよ。」

「なによお、笑ったりなんかしないって。」

あたしの顔をジーツと見て、思いつきりの覚悟を決めた表情でポツリと言った。

「花嫁修業中…。」

えっ？

「うちの親が、あんたみたいなのはサッサと嫁にやった方がええて言うて。せやけど、このままじゃ何もできん嫁になるからって、料理やの掃除やのて毎日やらされてんの。」

うう…、なんちゆう大それたことを…。しかし、サーミンのそういう姿ってあまり想像できないんだわ。やっぱり、フェリアでの生活を見すぎたせいかしら。どうしたって家でおとなしくしているタイプには思えないんだけど。

「じゃ、尾田さんのことを両親に紹介したんだ？」

言いながら尾田さんの表情を見ると、なんとなく意味ありげな笑みを浮かべている。

「ううん、まだ…。」

「なによ、それなのに花嫁修業なのお？」

「だけど…。」

サーミンたら下を向いちゃって、およそらしくない雰囲気醸し出している。

「じゃ、半年も行方不明だった娘がさ、いきなりどこの馬の骨とも分からない男を連れてきて、結婚したいんですけどなんて言ってさ、許してくれると思う？」

言葉に詰まったサーミンを見かねたのか、ここで尾田さんが代わりに答える。

「そりゃそうだけど、尾田さんの場合は…。」

「そう、そこなんだよ。」

「へっ？」

「彼女が花嫁修業をする羽目になった原因。」

「どういうこと？」

尾田さんの場合…というのは、尾田さんの母方の祖父っていう人は、日本でも3本の指に入ると言われている片桐財閥の総帥その人で、片桐グループの現在の社長が尾田さんのお父さん。つまり、尾田さん自身は、資産数百兆円とも言われている片桐グループの次期後継者だったりするんだ。だから、どこの馬の骨な訳じゃない。

「レイちゃんも知ってるの通り、僕はうちの会社には興味ないんだけど、世間はそうは見えてなくてね。こないだも新聞にでっかく出ていただく。」

まあ、そりゃ仕方がないことだと思う。尾田さんが行方不明になっていた間、次期後継者を誰にするかでかなりもめていたことくらいはあたしでも知っている。その本人が帰って来たというのは、もめごとを解決する唯一の方法だっただろうから。

「それで、そのニュースを見たらうちの親が、どうせだったらこういう人と結婚すれば幸せになれるんだから、今からでも遅くはないから花嫁修業をしなさいと…。」

「で、ちょうどそういう話しをしていた頃に、僕がどうしてもサーミンに会いたくてサーミンの家を訪ねてしまったんだ。そうしたら、彼女のお母さんに気に入られてしまっただけね。」

そう言って笑う尾田さんの瞳は心なし寂しげな雰囲気が漂う。尾田さんには気に入られたのが尾田さん自身ではなく、尾田さんの家だと言うことが分かっているんだ。

「おい、話し終わったか？」

あはっ、グッドタイミング！

「う、うん。」

「じゃあ、そろそろ何か食べよう。ビーフシチューは煮込んでいるから、あとのメニューは任した。」

台所で何をしているのかと思っていたらシチューを煮込んでいたのか、そう言えばなんかとてもいい匂いが漂ってくる。

「うん、じゃ、すぐ仕度するわね。サーミンも手伝ってくれるでしょ？」

「ま、任せといて、花嫁修業はだてじゃないところを見せてやるわ。」

その夜は潤のビーフシチューとサーミンの手料理による夕食で、極上のワインなんかを開けてみちゃって久々の再開を祝った。地球に戻ってきてからの半年、あたし達にはいくらでも話すことがあった。それに現在のフェリアについても…。

ピピピピピピッ…、ピピピピピピッ…。

話しがちょうど盛り上がっている時、旧タイプの黒電話が突然軽い電子音を奏でる。うっ、あたし、駄目。思わず反射的に壁にへばりついてしまう。

あたし、あの事件以来どうも電話恐怖症になったらしくって、見るのも嫌だし、呼び出し音が鳴るなんて考えられない。そのせいで自分の部屋の電話はずしちゃったので、普段は潤のどこ

ろで呼び出してもらっている。それでも、一度染みついたトラウマは簡単には取れないのか、こうして電話が鳴るたびに身体がこわばってしまう。

そんなあたしに悪戯っぽい視線を送って、潤がようやく受話器を取った。二言、三言、電話の向こう側と話しをして受話器を置くと、あたし達に向かってニヤッと笑いかけた。

「今に面白いものが見られるよ。」

妙にもったいぶって煙草に火をつけると、ゆっくりと押入れを開けた。そこには押入れという場所には似つかわしくない大きなモニターが入っていた。別の場所から変な機械を引っ張りしてくると、部屋の隅でひきつったままのあたしにコード類を投げてよこす。つまり、手伝ってことなんだろうけど、何をどうしていいかも分からない。

潤は複雑そうな配線を何も見ずに簡単そうに接続していく。いつまでも壁にへばりついたままでいる訳にもいかず、分かる範囲で機械同士をコードでつないで潤に渡した。全部つながり終わったのかなと思った瞬間に、またもや電話の電子音が鳴り響く。もう、心臓に悪いよう。

潤はそんなあたしを見て、またニヤニヤしながらモニターのスイッチを入れ、その脇にあるダイヤルを回して何かを調整し始めた。初めは何も映っていなかったモニターに、潤の指の動きとともに映像が浮かんでくる。

えっ、まさか…、でも…、うそお！

「よお、みんな久しぶり。元気そうでなによりだよ。」

「アトリー！」

あたし達は声を揃えて叫んでしまった。

「なんで…？」

これ、いったいどういうことなの？なんでモニターにアトリーが映っているのお…？

「驚いただろ、でも、正直言って、俺もこんなにうまくいくとは思ってなかった。まあ、今日はみんなにどうしても直接伝えたいことがあって、ちょっとシグマに無理を言ってしまったんだ。ほんと、礼を言うよ。」

な、懐かしい、半年ぶりのアトリーの声。

「なあんや、どうも急に二人で来いなんて言うから変だと思っていたら、あたしとショウを呼んだのはこういう理由だったん。」

「ま、そういうこと…かな。」

あは、潤ったら照れてんの。顔が耳まで真っ赤。

「ね、他のみんなは？」

あたしがモニターの上に乗っているカメラに向かって喋ると…。

「俺もいるぜい！」

「レイコさん、お久しぶり。」

「元気にやってる？」

「よお！」

「お久しぶりです。」

ユーリ、ジン、ジェニー、ハリー、ユウ…、みんな懐かしい顔ばかり。

「で、俺が無理言ったのは、今日が俺達にとって特別な日なんだ。」

「特別な…日って？」

「ん、実は、今日がジュールの新しい建国の日なんだ。で、みんなを招待するという約束を履行しようと思ってね。」

やったあ！あのジュールが再興したんだ。潤ったら何も言ってくれないんだもんなあ。でも、本当にすごいと思う。あのメチャメチャに破壊されていた都市が、わずか一年で元に戻るなんて…。

「みんな都合は大丈夫かな？」

「何言うてんの、都合なんてどうあったって行くさかい、待っとり。」

うん、うん、サーミンの声、半分くらい涙声に変わっている。でも、もう最高の気分。

あたし、初めてフェリアの地に降りた時、ちょっぴり自分の運命を恨んだりしたけど、もし本当に運命なんてものがあつたら、今は感謝したいくらい。

ふと目に浮かぶフェリアとジュール。

惑星フェリア・シリーズ I

フェリアの空にさよならを！

そう、だからグラスを持ち上げて……。
「乾杯！」

A C T X 「EPILOGUE FERIA」

『フェリアの空にさよならを！』

—惑星フェリア・シリーズ I—

S60. 27. DEC <<H20. 20. MAR>>